様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月　４ 日現在

機関番号：１４５０１
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2017～2020
課題番号：１７Ｈ０２４０７

研究課題名（和文）民主政アテナイの演説文化：法廷における実践的修辞戦略に関する総合的研究

研究課題名（英文）Oratorical Culture in Democratic Athens: Rhetorical Strategies in Forensic Speeches

研究代表者
佐藤　昇（Sato, Noboru）

神戸大学・人文学研究科・准教授

研究者番号：５０５４８６６７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　13,100,000円

研究成果の概要（和文）：古典期アテナイの法廷弁論に用いられた修辞の実践的機能について分析し、討議的民主政を成立せしめた演説文化の特性を具体的に明らかにできた。（１）古典期アテナイの修辞技法が、実践の「場」、すなわち民会や法廷、あるいは演説する立場に応じて、異なる演説技法を用いる文化が発達していたことが明らかとなった（２）法廷演説のナラティヴにおいて、同時代の宗教的実践や社会的背景などが、文脈に即して影響を与えていることが具体的に明らかとなった。（３）演説者自身の人格提示あるいは訴訟相手の人格攻撃に加え、関連する人物に関する性格描写にも、状況に応じた一定の傾向が見られ、陪審員説得に重要であることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
旧来、古典期アテナイの民主政は権力関係や民主的な制度から分析されることが多かった。これに対し、本研究では法廷弁論の実践的修辞戦略を分析することで、従来にはない角度からアテナイ民主政の実態に迫り、民主政が実際にはいかに機能していたのかを明確にすることができた。この学術的成果を口頭報告、論文、研究書を通じて発表した他、関連する啓蒙書、翻訳書などを公刊することで広く社会還元を行った。

研究成果の概要（英文）：Through comprehensive and detailed analyses of the rhetorical strategies used in the forensic orations in fourth-century Athens, which was fundamentally crucial to understand the rhetorical culture and the Athenian Democracy, we have revealed the following aspects. (1) The Attic orators developed different rhetorical strategies well-suited for the speaker's legal/social position or public occasions, i.e., the people's assembly or the courtroom. (2) Athenian rhetorical strategies were heavily influenced, especially by contemporary religious and social practices. (3) In addition to the speaker's character presentation of his own or character assassination of his opponents, the strategies of character portrayal of other people mentioned in the forensic speeches were also crucial for persuading the Athenian jurors.

研究分野：古代ギリシア史

キーワード：レトリック　古代ギリシア　西洋古代史　民主政　アテナイ　法　修辞　演説

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

前 5 世紀から前 4 世紀にかけて古代ギリシアの都市国家アテナイでは演説文化が隆盛した。演説の応酬と市民の説得を通じた「討議」が決定的重要性を有するアテナイ民主政を実体から理解するには、種々の権力関係や民主的制度を解き明かすばかりではなく（*e.g.*, J. Ober, *Mass and Elite in Democratic Athens*, Princeton 1990; M. H. Hansen, *Athenian Democracy in the Age of Demosthenes*, Oxford 1991)、当時のマスコミュニケーション手段でもあった「演説」文化の発展状況を具体的に解明する必要がある。中でも一般市民が裁判員を務めた法廷での修辞は、著しい発展を遂げていた。修辞とは一般に言語の表現技法を指すが、現実の集会に集った人々を説得するには、同時代の法や宗教、社会的背景、政治的状況などを踏まえた上で、聴衆の共感を誘うようにして、さまざまに修辞を凝らす必要があった。従って、民主政を支えた実践的な修辞の文化を理解するには、同時代の状況を種々の角度から総合的に勘案しなければならない。

これに対して、旧来、古代ギリシアの修辞をめぐる研究は、国内外ともにもっぱら文学研究の対象とされ、殊にアリストテレスを中心とする修辞理論などが分析の対象とされていた。近年になって、欧米では、法廷弁論を主たる対象に修辞の実践的機能を分析する研究が現れ始め、ナラティヴ分析等の文学、法学の手法を援用する研究も登場している。これらを通じ、アテナイの法廷では法的な議論のみならず、出来事を物語的に叙述する「ナラティヴ」が会衆説得に重要であったことなども指摘されてきている。

だが、この新しい研究は二つの問題を抱えている。(1) 先行研究には、ナラティヴの重要性や特定の修辞技法の有効性を、弁論全般に一般化する傾向が強く見られる。しかし実際には、公的訴訟・私的訴訟・遺産相続訴訟、原告弁論・被告弁論といった弁論のジャンル毎に、要求される修辞は異なっていた。したがって、実践を通じて発展した修辞の機能は、先行研究では十分に解明されていないことになる。討議的なアテナイ民主政を支えた演説文化の歴史的特性を正しく理解するためには、修辞が実際の弁論ジャンルに応じていかに実践的に機能していたのか、検討し直す必要がある。(2) 修辞技法は欧米でも、今尚文学的観点から分析される傾向が強い。しかし実践での修辞は、既述のように、法、宗教儀礼、社会慣行等、歴史的現実から影響を被り、逆にそれらを利用しながら発展してきた。従って、討議的民主政の下で、会衆説得に実践的に用いられた修辞の機能は、史学、法学、文学的観点から多角的に分析されねばならない。

２．研究の目的

本研究は、古典期アテナイにおける演説文化の歴史的特性を具体的に明らかにし、新たな民主政像を構築することを目標とする。演説合戦とこれを通じた同胞市民の説得を本質とし、討議的性格を有するアテナイ民主政の実態を理解するには、当該社会における説得技術、演説文化の特性を具体的事例に即して解明する必要がある。本研究では、種々の演説のうちでも、著しい発達を見せたと考えられる法廷での修辞技術に注目する。そしてとりわけ (1) 修辞が、法廷の環境や法制、宗教、歴史、家族制度といった「歴史的現実」をいかに取り込んでその機能を発達させていたのか、具体的に示すことを目指す。さらに、(2) 公的訴訟、私的訴訟、遺産相続訴訟、そして原告演説、被告演説など、各々のジャンルに応じた修辞戦略の発達があったことを明確にする。

具体的には、(1) 法に関する議論がいかに一般大衆の説得に寄与したのか、特に法概念の説明方法、引用方法に注目し、法制度の歴史的変化にも配慮しながら、ジャンル毎の差異を検討する。

(2) 近年の研究が重要性を指摘する「ナラティヴ」部分においては、宗教儀礼、ポリスの歴史、家族（オイコス）や男女関係（ジェンダー）に関する話題が頻出する。よって、これらが法廷弁論中で如何に提示されているのか、ジャンル毎の差異を意識し、ナラティヴ分析の手法を援用して検討する。その際、歴史的状況（宗教慣行や歴史的事件、家族制度）とのズレ、歪曲に注意を払い、力点の置き方、言及される文脈を分析して、その修辞的機能を解明する。

(3) 現実の法廷で演説を行う際、法廷の環境（聴衆の反応、見物人、喧騒、周囲の景観）を利用したレトリックが頻繁に利用される。この点について、文脈や力点の置き方に注目して、ジャンル毎の機能的差異を明らかにする。

(4) 上記の焦点は、相互に関連しながら戦略的に用いられることが多い。例えば、宗教儀礼を語る際、女性が格別に重要な役割を担っていたり、あるいは法を引用する際、ポリスの歴史が語られたりする。こうしたトピック相互の関係を明らかにし、その修辞的機能を解明する。

(5) また、上記の修辞戦略と、修辞理論は相互にいかなる影響を与え合ったのか、前 4 世紀までの修辞理論書を比較対象とし、実践と理論の関係を検討する。以上を通じて、前 5-4 世紀のアテナイにいかなる演説文化が発達していたのか、その歴史的特性を総合的に解明する。

３．研究の方法

本研究の目的は、古典期アテナイの法廷弁論に用いられた修辞の実践的機能について総合的に分析し、討議的民主政を成立せしめた演説文化隆盛の歴史的特性を解明することにある。このた

め、修辞が実際の法廷でいかなる使われ方をしたのか、とりわけ種々の社会的・歴史的現実にどれほど影響を受け、逆にそれらをいかに利用したのかという点、さらにそれらの修辞が弁論のジャンルに応じて如何に戦略的に利用されたのかという点に注目し、法廷弁論の修辞分析を行う。

具体的には、まず代表者佐藤が、法廷での実際の演説において、法廷の環境（野次などの聴衆の反応、見物人の存在など）をいかに修辞的に利用していたのか、弁論のジャンルや文脈などに注意して分析を行う。分担者葛西は、弁論における法的議論とナラティヴの関係について分析を進める。分担者齊藤、上野、研究協力者平田・桜井・宮﨑は、弁論のナラティヴ部分の修辞的戦略について分析を加える。事件の経過などを語るナラティヴ部分には、宗教儀礼、ポリスの歴史・神話的過去、家族やジェンダーなどに関わる議論が頻出するため、齊藤はこのうち宗教儀礼に関する話題を、上野はポリスの歴史・神話的過去に関する話題を、平田・桜井・宮﨑は家族やジェンダーに関するナラティヴを担当する。その際、それぞれの話題がいかなる修辞的機能を果たしたのか、ジャンル毎の差を踏まえ、言及される文脈、力点の置かれ方などについて精査する。分担者吉田は、修辞理論と実践的修辞戦略の関係について検討する。前4世紀までに成熟した修辞理論は、アテナイの法廷で実戦的に用いられた修辞戦略を反映して練り上げられたものである一方、実践とは異なる側面も少なくない。したがって前4世紀までに記された修辞理論と、実戦で用いられた修辞の差異について、法的議論とナラティヴ、弁論ジャンルによる異動、修辞理論の歴史的変化といった点に留意しつつ、検討を進める。

以上の諸点は、個々に分析を進めねばならないが、同時に、宗教儀礼とジェンダー、ポリスの歴史と法の引用など、異なる修辞戦略の間で深い相互関係が見られることがしばしばある。こうした相互に関連する論点については、定期研究会の中で検討材料として取り上げ、代表者佐藤が中心となり、関連する話題を扱う分担者と共に共同で分析を進めていくこととする。

《具体的計画》

（１）個々の研究テーマについては科研費を利用して先行研究、資料収集に努め、法廷弁論及び関連の古典文献の分析を進めた。主たる分析対象は、前5世紀末～前4世紀の法廷弁論だが、それぞれのテーマに即して、同時代の民会演説、演示演説、その他の文献資料、碑文なども比較対象として検討の材料とした。

（２）毎年夏季に渡欧し、資料調査を行うとともに海外の研究協力者との意見交換を行った。2018年度は佐藤、上野がロンドン大学、在アテネ英国考古学研究所を訪問し、L. Rubinstein教授、C. Kremmydas博士、K. Vlassopoulos教授らと意見交換を行った。2019年度は佐藤、齊藤がロンドン大学、オックスフォード大学、ケンブリッジ大学、エジンバラ大学を訪問し、L. Rubinstein教授、R. Parker教授、R. Osborne教授、M. Canevaro教授らと意見交換を行った、2020年度以降はコロナ禍のため、オンライン会議を通じて議論を重ね、2022年度は佐藤がウィーンにおける資料調査、ポーランド（クラクフ大学、シレジア大学）での研究会発表行い、併せて、J. Filonik博士らとの意見交換を行った。

（３）毎年10月ごろに代表者・分担者を中心とする研究会を開催し、成果報告と意見交換を行った他に、海外の研究協力者を招聘し、研究発表並びに意見交換会を開催した。2018年9月にはK. Vlassopoulos教授（クレタ大学）を招聘し、関心を共有する研究者と合同で研究会を行なった（The 4th Euro-Japanese colloquium on the Ancient Mediterranean World, 名古屋大学)。2019年3月にはM. Canevaro教授（エジンバラ大学）を招聘し、2度の研究会（京都大学、東京大学）を開催した。コロナ禍による中断を挟み、2023年1月にJ. Kindt教授（シドニー大学）を招聘し、2度の研究会（同志社大学、共立女子大学）を開催した。

（４）研究成果の発表及び意見交換のため、代表者、分担者、研究協力者はそれぞれの成果について、個別に国内外の学会において積極的に発表を行った。このうち、代表者はアテネ大学、ペロポネソス大学（ギリシア）で開催された国際学会、米国ニューオリンズで開催された国際レトリック史学会に参加し、それぞれ個別報告を行うとともに、A. Serafim博士（アテネ大学、当時)、A. Markantonatos教授（ペロポネソス大学)、M. Edwards教授（Roehampton大学、英国、当時)、D. Mirhady教授（Simon Fraser大学、カナダ）など、各国の研究者と意見交換を行った。

（５）本研究課題の議論全体を検討し、国内外の研究者との意見交換を行うため、公開研究会を行った。2019年度は5月に開催された日本西洋史学会第69回大会の小シンポジウム「古典期アテーナイにおける討議的民主政とレトリック文化」を開催した。代表者佐藤、分担者齊藤、上野、研究協力者宮﨑が報告を行い、分担者吉田、研究協力者桜井らがコメンテータを務めた。また2021年3月にはInternational Conference on Character Portrayal of the Attic Forensic Speechesをオンラインで開催し、代表者、分担者のほか、研究協力者宮﨑、さらにL. Rubinstein教授、C. Kremmydas博士他、海外の研究協力者合計5名が研究報告を行い、その他の分担者、研究協力者、そして関心を共有するその他の研究者と共に意見交換を行った。

４．研究成果

（１）古典期アテナイの修辞技法は、単に文彩の彫琢技法として成熟したばかりでなく、実践の「場」に応じた発展を見せていたことが、具体的に明らかになった。例えば、野次を誘発する呼びかけは、法廷弁論、とりわけ告発側が頻繁に行っていた。被告側の演説を歪め、弱点を強調して聴衆に印象付ける戦略とともに用いられた手段であった。これは被告側演説では用いられない。また現存史料による限り民会演説でも用いられないことが明らかとなった。また、野次が行

われた過去についても、民会における野次については法廷弁論で、弁者の都合に応じて想起されることが頻繁にあった一方、民会弁論では語られることがなかった。種々の要素が影響するが、場に応じて異なる演説技法を用いる文化が発達していたことが明らかとなった。
（２）法廷演説のナラティヴにおいて、同時代の宗教的実践や社会的背景などが、文脈に即して影響を与えていることが具体的に明らかとなった。例えば、法廷で陪審員を説得するに当たり、とりわけ人間関係（親族関係など）を論証する必要がある場合には、同時代の宗教的慣行や社会的背景に則したナラティヴ（例えば、宗教行事への同行、勧誘などの詳細）を提示することが肝要であり、そのことが古代ギリシアの演説に特徴的な「蓋然性（エイコス）」の議論と密接に結びつくことが、実例から明らかにされた。
（３）登場人物描写の重要性がより一層明らかとなった。演説者自身が、説得性を高めるに相応しい自己提示をすることや、訴訟相手に対して人格攻撃が行っていたことなどは夙に指摘されていた。しかしそればかりでなく、関連して登場する人物、周辺の環境、引き合いに出される神話上の人物、法廷周辺に集う市民団なども、演説の状況に応じて、一定の傾向をもった性格づけがなされる様子が見られ、聴衆の説得に重要であることが明らかになった。とりわけこの点は、海外の研究協力者との共同研究の中でその重要性が明確になった点であり、2021 年 3 月に開催した国際学会でも特にこの点を集中的に議論することとなった。この学会報告を元にした国際共著論文集は、現在 Bulletin of the Institute of Classical Studies 別冊として出版すべく、準備中である。
（４）レトリックを考える際に、レトリックの限界、当時のレトリック観、修辞理論が生成される背景（実践的演説との関係）も踏まえて考察する必要があることもまた明らかにされた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計21件（うち査読付論文　7件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　8件）

１．著者名 佐藤昇	４．巻 69
２．論文標題 体育競技への眼差しと軍事：変わりゆくギリシア世界の中で	５．発行年 2022年
３．雑誌名 西洋古典学研究	６．最初と最後の頁 84-91
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Noboru Sato	４．巻 5
２．論文標題 Hellenistic Didyma and the Milesian Past	５．発行年 2023年
３．雑誌名 Japan Studies in Classical Antiquity	６．最初と最後の頁 78-98
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 齊藤貴弘	４．巻 9
２．論文標題 「聖なる武具」ヒエラ・ホプラ ―古典期アテナイにおける「聖-俗」の変容を巡って ―	５．発行年 2022年
３．雑誌名 『多文化社会研究』	６．最初と最後の頁 28-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 齊藤貴弘	４．巻 -
２．論文標題 ペルシア戦争がアテナイに与えた『聖俗』観への影響―神々と人間の地平	５．発行年 2022年
３．雑誌名 パルテノン彫刻研究 ―オリエント美術を背景とする再解釈の構築―	６．最初と最後の頁 49-61
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 齊藤貴弘	4．巻 8
2．論文標題 古代ギリシアの聖俗空間をめぐる一考察 ―「聖なる杜」alsos について ―	5．発行年 2021年
3．雑誌名 『多文化社会研究』	6．最初と最後の頁 10-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 吉田俊一郎	4．巻 70
2．論文標題 書評：竹下哲文『詩の中の宇宙 マーニーリウス『アストロノミカ』の世界』Pp. xiv+251，京都大学学術出版会，2021，4000円.ISBN 9784814003150	5．発行年 2021年
3．雑誌名 西洋古典学研究	6．最初と最後の頁 88-90
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 上野愼也	4．巻 131(5)
2．論文標題 ヨーロッパ：古代ギリシア（2021年の歴史学界：回顧と展望）	5．発行年 2022年
3．雑誌名 史学雑誌	6．最初と最後の頁 317-321
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 葛西康徳	4．巻 -
2．論文標題 コモン・ローにおける『法学提要』の意義－その歴史と現状―	5．発行年 2021年
3．雑誌名 第72回法制史学会総会・研究大会報告資料集	6．最初と最後の頁 110-127
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 上野慎也	4．巻 68
2．論文標題 書評「小池登・佐藤昇・木原志乃編『『英雄伝』の挑戦：新たなプルタルコス像に迫る』」	5．発行年 2020年
3．雑誌名 西洋古典学研究	6．最初と最後の頁 128-131
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 齊藤貴弘	4．巻 7
2．論文標題 【覚え書】 「北のアテネ」エジンバラで出会ったもう一つの「パルテノン・フリーズ」	5．発行年 2020年
3．雑誌名 多文化社会研究	6．最初と最後の頁 34-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 齊藤貴弘	4．巻 48
2．論文標題 〈書評〉「郊外」（上野慎也「郊外―古典期のアテーナイ」（浦野聡編『古代地中海の聖域と社会』勉誠出版，2017，49-105）に寄せて―古代ギリシアの「聖―俗」空間についての覚え書	5．発行年 2020年
3．雑誌名 愛媛大学法文学部論集〈人文学編〉	6．最初と最後の頁 85-96
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 吉田俊一郎	4．巻 14
2．論文標題 古典期ラテン修辞学におけるcontroversia figurata（文彩つき模擬法廷弁論）について	5．発行年 2019年
3．雑誌名 フィロロギカ	6．最初と最後の頁 36-59
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 葛西康徳	4．巻 68
2．論文標題 書評・粟辻悠「古代レトリック再考（一）――ローマ世界における法廷実践の観点から――」（『法学論集』(関西大学)六六－四）、同「古代レトリック再考（二）――ローマ世界における法廷実践の観点から――」（『同前』六七－一）	5．発行年 2019年
3．雑誌名 法制史研究	6．最初と最後の頁 327-331
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 葛西康徳	4．巻 51
2．論文標題 古代ギリシア教に改宗することはできるか	5．発行年 2019年
3．雑誌名 史友	6．最初と最後の頁 27-52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 葛西康徳	4．巻 68
2．論文標題 書評・粟辻悠「古代レトリック再考（一）――ローマ世界における法廷実践の観点から――」（『法学論集』(関西大学)六六－四）、同「古代レトリック再考（二）――ローマ世界における法廷実践の観点から――」（『同前』六七－一）	5．発行年 2019年
3．雑誌名 法制史研究	6．最初と最後の頁 327-331
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 上野愼也	4．巻 65
2．論文標題 逆しまに読む倒錯　イソクラテース『ブーシーリス』	5．発行年 2019年
3．雑誌名 共立女子大学文芸学部紀要	6．最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 上野愼也	4．巻 —
2．論文標題 テキストと修辞　イソクラテース『ブーシーリス』	5．発行年 2019年
3．雑誌名 『地中海の魅力　極東証券寄附講座慶應義塾大学文学部日吉設置総合教育科目2018』	6．最初と最後の頁 79-82
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 —

1．著者名 アレクサンダー・ヘルダ著、佐藤昇訳注	4．巻 31
2．論文標題 ミレトスのタレスとギリシア都市構想（アーバニズム）の誕生―賢人は如何にして都市を創建しただろうか―	5．発行年 2018年
3．雑誌名 『クリオ』	6．最初と最後の頁 63-106
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 —

1．著者名 齋藤貴弘	4．巻 53
2．論文標題 書評　高畠純夫『ペロポネソス戦争』	5．発行年 2017年
3．雑誌名 『白山史学』〈東洋大学〉	6．最初と最後の頁 107-116
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 —

1．著者名 齋藤貴弘	4．巻 3
2．論文標題 古代ギリシアの「巡礼」ーエレウシスの秘儀入信を中心に	5．発行年 2018年
3．雑誌名 『四国遍路と世界の巡礼』〈愛媛大学法文学部附属四国遍路・世界の巡礼研究センター〉	6．最初と最後の頁 56-63
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 —

１．著者名 桜井万里子	４．巻 78
２．論文標題 書評　浦野聡編『古代地中海の聖域と社会』	５．発行年 2018年
３．雑誌名 『史苑』（立教大学史学会）	６．最初と最後の頁 259-264
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計43件（うち招待講演　10件／うち国際学会　17件）

１．発表者名 Noboru Sato
２．発表標題 Character Portrayal of Corona: People Around the Athenian Law Court
３．学会等名 Seminar at The Institute of Classical Philology of the Jagiellonian University in Krakow（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 Noboru Sato
２．発表標題 Rhetorical strategies of referring to thorubos in classical Athens
３．学会等名 Seminar at at The Institute of Literature of the University of Silesia and the Katowice Branch of the Polish Philological Society（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 佐藤昇
２．発表標題 野次馬の意義：アッティカ法廷弁論に見られる「場」の修辞的利用
３．学会等名 古代ギリシア文化研究所2021年度年次総会・研究集会
４．発表年 2021年

１．発表者名 佐藤昇
２．発表標題 体育競技への眼差しと軍事ー変わりゆくギリシア世界の中で
３．学会等名 第71回日本西洋古典学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 Noboru Sato
２．発表標題 Character Portrayal of Corona: People Around the Athenian Law court.
３．学会等名 International Conference on Character Portrayal of the Attic Forensic Speeche
４．発表年 2021年

１．発表者名 Takahiro Saito
２．発表標題 Female, citizenship and "hiera kai hosia" from a perspective of outside/beyond polis
３．学会等名 Workshop Citizenship and participation in classical Athens（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 齊藤貴弘
２．発表標題 史料としての法廷弁論
３．学会等名 古代ギリシア文化研究所 第2回 西洋古代史インターユニ・ワークショップ（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 齊藤貴弘
２．発表標題 古典期の弁論：研究史の展開―本邦を中心に―
３．学会等名 古代史研究会特別研究集会
４．発表年 2021年

１．発表者名 Takahiro Saito
２．発表標題 How were religious topics used as “proofs” with the speaker’s character in inheritance cases?
３．学会等名 International Conference on Character Portrayal of the Attic Forensic Speeche（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 齊藤貴弘
２．発表標題 「親密さ」の虚像―イサイオス第1 番の事例から
３．学会等名 第19 回古代史研究会大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 上野愼也
２．発表標題 エウピレートスはどんな人：Lys．1 で考える人物描写
３．学会等名 古代史の会
４．発表年 2021年

１．発表者名 Shinya Ueno
２．発表標題 Theseus, a Rhetorical Figure Inside (and) Out
３．学会等名 International Conference on Character Portrayal on Attic Forensic Speeches（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 上野愼也
２．発表標題 廃墟について：中国とギリシアの比較
３．学会等名 日本漢詩文学会第十五回例会
４．発表年 2021年

１．発表者名 葛西康徳
２．発表標題 コモン・ローにおける『法学提要』の意義―その歴史と現状―
３．学会等名 第72回法制史学会総会・研究大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 Yasunori Kasai
２．発表標題 Between an amateur and a professional: To what extent the speaker and the audience can understand the 'technicality' of Greek law (Dem.36-38).
３．学会等名 International Conference on Character Portrayal on Attic Forensic Speeches（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Yasunori Kasai
２．発表標題 The Greeks on Compromise, Before and After the Judgment (Verdict), with Special Reference to Plato's Nomoi
３．学会等名 Cambridge Classics Faculty Ancient History Semina（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 Yasunori Kasai
２．発表標題 The Greeks on Compromise (even) in Greek Tragedy, with Speciaal Reference to Aeschylus' Eumenides
３．学会等名 Seminar at Zurich University（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 Yasunori Kasai
２．発表標題 The August Revolution in Japan 1945
３．学会等名 The 25th British Legal History Conference（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 Makoto Miyazaki
２．発表標題 Character and Action in Athenian Court Speeches: In the Case of Acts of Violence
３．学会等名 International Conference on Character Portrayal on Attic Forensic Speeches（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Noboru SATO
２．発表標題 Populism and corruption: Demosthenes’s strategies of character portrayal in the Athenian Assembly
３．学会等名 The Twenty-Second Biennial Conference of the International Society for the History of Rhetoric（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 佐藤昇
２．発表標題 古典期アテーナイにおける商人たちの交流
３．学会等名 第43回地中海学会大会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 佐藤昇
２．発表標題 甘言と収賄：民会演説における信用失墜戦略とその変容
３．学会等名 第69回日本西洋史学会大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 上野愼也
２．発表標題 故事とトポス
３．学会等名 第69回日本西洋史学会大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 上野愼也
２．発表標題 テーセウス頌：イソクラテース『ヘレネー』
３．学会等名 古代ギリシア文化研究所総会・研究会
４．発表年 2019年

１．発表者名 齊藤貴弘
２．発表標題 宗教的言説と説得性 ―イサイオス相続関連弁論を中心に―
３．学会等名 第69回日本西洋史学会大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Yasunori Kasai
２．発表標題 Hybris, Iniuria and Harrasment
３．学会等名 SIHDA conference at Edinburgh, U. K.
４．発表年 2019年

１．発表者名 Yasunori Kasai
２．発表標題 Boqisic and 'Ancient Law'
３．学会等名 Comparative Studies of Civil Law between Modern South Slavic Regions and Japan
４．発表年 2019年

１．発表者名 宮崎亮
２．発表標題 相続をめぐる法的言説ーイサイオスの場合ー
３．学会等名 第69回日本西洋史学会大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Noboru SATO
２．発表標題 Oral Transmission of Knowledge and Suppressing Audience’s thorybos in Classical Athens
３．学会等名 The 4th Euro-Japanese colloquium on the Ancient Mediterranean World（国際学会）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 佐藤昇
２．発表標題 アッティカ弁論における「喧騒」言説の修辞的機能
３．学会等名 古代史研究会第６回春季研究集会（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 齋藤貴弘
２．発表標題 アスクレピオスのアテナイ勧請とテレマコス記念碑―概観と近年の研究動向
３．学会等名 第1回パルテノン科研研究会（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Takahiro SAITO
２．発表標題 Embodiment ’ of Attika and Use/Abuse of Theseus as its symbol
３．学会等名 One Day Workshop Approaches to Local Historiography（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 齋藤貴弘
２．発表標題 宗教的言説と説得性―相続関連弁論を中心に
３．学会等名 古代ギリシア文化研究所2018年度研究会
４．発表年 2018年

１．発表者名 上野愼也
２．発表標題 テキストと修辞
３．学会等名 慶應義塾大学文学部極東証券寄付講座「地中海の魅力」（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 上野愼也
２．発表標題 イソクラテース『ブーシーリス』を読む
３．学会等名 古代史の会
４．発表年 2018年

１．発表者名 吉田俊一郎
２．発表標題 文彩を伴った模擬法廷弁論controversia figurata について ――大セネカ、クインティリアヌス、擬クインティリアヌス『小模擬弁論集』に 共通するある主題の検討――
３．学会等名 第17回フィロロギカ研究集会
４．発表年 2018年

１．発表者名 佐藤昇
２．発表標題 口頭による知の伝達―聴衆への配慮と修辞戦略―
３．学会等名 第67回日本西洋史学会大会
４．発表年 2017年

１．発表者名 佐藤昇
２．発表標題 Thorubos in Athenian speeches, a sign of (dis)unity
３．学会等名 International Conference The Rhetoric of (dis)unity: Community and division in Greco-Roman prose and poetry（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 佐藤昇
２．発表標題 Philip’s xenoi in Demosthenes’ public speeches
３．学会等名 From the Markets to the Associations: A Comprehensive View of the Greek Mercenary World in the Classical and Hellenistic Periods'（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 佐藤昇
２．発表標題 Additional information in witness testimonies in classical Athens
３．学会等名 Second International Conference on Drama and Oratory（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 齋藤貴弘
２．発表標題 古代ギリシアの「巡礼」ーエレウシスの秘儀入信を中心に
３．学会等名 愛媛大学法文学部附属四国遍路・世界の巡礼研究センター研究集会
４．発表年 2017年

１．発表者名 吉田俊一郎
２．発表標題 大セネカにおける警句sententiaeに関する一考察
３．学会等名 第16回フィロロギカ研究集会
４．発表年 2017年

１．発表者名 上野愼也
２．発表標題 修辞的に読む　古代ギリシアの場合
３．学会等名 日本漢詩文学会第11回例会（招待講演）
４．発表年 2018年

〔図書〕　計29件

1．著者名 佐藤昇・木曽明子・吉武純夫・平田松吾・半田勝彦訳	4．発行年 2020年
2．出版社 京都大学学術出版会	5．総ページ数 760
3．書名 西洋古典叢書　デモステネス　弁論集 6	

1．著者名 デイヴィド・アブラフィア、高山 博、佐藤 昇、藤崎 衛、田瀬 望	4．発行年 2021年
2．出版社 藤原書店	5．総ページ数 536
3．書名 地中海と人間―原始・古代から現代まで Ⅰ	

1．著者名 デイヴィド・アブラフィア、高山 博、佐藤 昇、藤崎 衛、田瀬 望	4．発行年 2021年
2．出版社 藤原書店	5．総ページ数 512
3．書名 地中海と人間―原始・古代から現代まで Ⅱ	

1．著者名 Yoshiyuki Suto, Josine Blok, Andronike K. Makres, Yasuhira Yahei Kanayama, Noboru Sato, Kyoko Sengoku-Haga, Kostas Vlassopoulos, Lilian Karali, Catherine Morgan, Judith M. Barringer, Marion Meyer, Elizabeth A. Meyer, Irad Malkin, Mariko Sakurai, P.J. Rhodes, J.E.Lendon, Akiko Moroo, Hajime Tanaka	4．発行年 2022年
2．出版社 Phoibos Verlag	5．総ページ数 295
3．書名 Transmission and Organization of Knowledge in the Ancient Mediterranean World	

１．著者名 Andreas Markantonatos, Vasileios Liotsakis, Andreas Serafim, Edward M. Harris, Asako Kurihara, Guy Westwood, Noboru Sato, Pasquale, Massimo Pinto, Robert Sullivan, Ioannis N. Perysinakis, David Mirhady, Margarita Sotiriou, Smaro Nikolaidou, Rosalia Hatzilambrou	４．発行年 2021年
２．出版社 De Gruyter	５．総ページ数 306
３．書名 Witnesses and Evidence in Ancient Greek Literature	

１．著者名 周藤芳幸、安川晴基、河江肖剰、田澤恵子、中野智章、高橋亮介、山花京子、長田年弘、佐藤昇、師尾晶子、澤田典子、佐藤育子、 川本悠紀子、芳賀京子、小坂俊介、福山佑子、桜井万里子	４．発行年 2022年
２．出版社 山川出版社	５．総ページ数 464
３．書名 古代地中海世界と文化的記憶	

１．著者名 神戸大学人文学研究科、樋口大祐、濱田麻矢、藤澤潤、市原晋平、宮下規久朗、佐藤昇、伊藤隆郎、久山雄甫、佐々木祐、吉川圭太、若狭優、安倍里美、古市晃、梶尾文武、中真生、酒井朋子、茶谷直人、芦津かおり、斎藤公太、有澤知世、小寺里枝、原口剛、菊地真、平川和、大橋完太郎、南コニー 、梅村麦生 、野口泰基 、他	４．発行年 2023年
２．出版社 神戸大学出版会	５．総ページ数 248
３．書名 人文学を解き放つ	

１．著者名 長谷川岳男，齋藤貴弘、阿部拓児、師尾晶子、澤田典子、高橋亮介、岸本廣大、志内一興、長谷川敬、池口守、樋脇博敏、南雲泰輔	４．発行年 2022年
２．出版社 ミネルヴァ書房	５．総ページ数 328
３．書名 はじめて学ぶ西洋古代史	

1．著者名 葛西康徳，ヴァネッサ・カッツァート，吉田俊一郎、吉川斉、納富信留、オズウィン・マリー、 ロバート・パーカー、ゲーアハルト・チュール 、クリストファー・メットカルフ、グンター・マーティン、アデル・C・スカフーロ、日向太郎、パトリック・フィングラス、フランソワ・リッサラーグ 他	4．発行年 2021年
2．出版社 知泉書館	5．総ページ数 592
3．書名 古典の挑戦	

1．著者名 浜本裕美、河島思朗、吉田俊一郎他	4．発行年 2021年
2．出版社 晃洋書房	5．総ページ数 388
3．書名 西洋古典学のアプローチ	

1．著者名 葛西康徳	4．発行年 2022年
2．出版社 Bibliotheca Wisteriana	5．総ページ数 271
3．書名 文化転移 ： 混合・普及・界面	

1．著者名 フランソワ・アルトーグ，葛西康徳，松本英実	4．発行年 2021年
2．出版社 東海教育研究所	5．総ページ数 428
3．書名 新装版オデュッセウスの記憶	

1．著者名 葛西康徳，野津寛，中山恒夫，川島重成，安西眞，三嶋輝夫，高田康成，大芝芳弘，秋山学，日向太郎，近藤智彦，Elizabeth Craik，Malcolm Davies，Kiichiro Itsumi，Christopher Rowe，Yoshinori Sano	4．発行年 2020年
2．出版社 Bibliotheca Wisteriana	5．総ページ数 336
3．書名 藤花のたわむれ = Dancing wisteria : 久保正彰先生の卒寿を祝して	

1．著者名 葛西康徳	4．発行年 2020年
2．出版社 Bibliotheca Wisteriana	5．総ページ数 172
3．書名 藤花のたわむれ = Dancing wisteria : 久保正彰先生の卒寿を祝して 2	

1．著者名 沢登文治、手塚沙織、山岸敬和、葛西康徳、菅原真、榎本雅記、岡田悦典、武内謙治、呉煜宗、小林武、佐藤創、デヴィッド・M・ポッター、金孝淑	4．発行年 2023年
2．出版社 三修社	5．総ページ数 296
3．書名 世界諸地域における社会的課題と制度改革	

1．著者名 H.　ボーデン、佐藤　昇	4．発行年 2019年
2．出版社 刀水書房	5．総ページ数 230
3．書名 アレクサンドロス大王	

1．著者名 Mike Edwards, Dimos Spatharas, Michael Gagarin, Catherine Psilakis, Christine Plastow, Brenda Griffith-Williams, Peter A. O'Connell, Noboru Sato, Kostas Apostolakis, Eleni Volonaki, Ruth Webb, Victoria Wohl, Nick Fisher, Christos Kremmydas, Rosalia Hatzilambrou	4．発行年 2019年
2．出版社 Routledge	5．総ページ数 278
3．書名 Forensic Narratives in Athenian Courts	

1．著者名 デモステネス、杉山 晃太郎、木曽 明子、葛西 康徳、北野 雅弘、吉武 純夫	4．発行年 2019年
2．出版社 京都大学学術出版会	5．総ページ数 702
3．書名 弁論集 5	

1．著者名 柏木昇、池田真朗、北村 一郎、道垣内正人、阿部博友、大嶽達哉、大村敦志、マシャド・ダニエル、松本英実、マサミ・ウエダ、佐藤やよひ、カズオ・ワタナベ、アウレア・クリスティーネ・タナカ、島村暁代、葛西康徳、長谷部由起子、アルベルト松本、長谷部恭男、他	4．発行年 2019年
2．出版社 信山社出版	5．総ページ数 680
3．書名 日本とブラジルからみた比較法	

1．著者名 Ulrike Babusiaux, Mariko Igimi, Johannes Platschek, Pompeo Polito, Cornelius G. van der Merwe, Wataru Miyasaka, Takeshi Sasaki, Carlos Amunategui Perello;, Yasunori Kasai	4．発行年 2019年
2．出版社 Bohlau Verlag	5．総ページ数 230
3．書名 "Messages from antiquity" : Roman law and current legal debates	

1．著者名 Ch. Carey, I. Giannadaki, B. Griffith-Williams, M. Gagarin, R. Osborne, E. M. Harris, C. Kremmydas, L. Horvath, Noboru Sato, L. Rubinstein, I. Arnaoutoglou, K. Apostolakis, V. Wohl, S.C. Todd, M. Canevaro, E. Volonaki, D. Phillips, R. Hatzilambrou	4．発行年 2018年
2．出版社 Brill	5．総ページ数 385
3．書名 Use and Abuse of Law in the Athenian Courts (Mnemosyne, Supplements, History and Archaeology of Classical Antiquity)	

1．著者名 佐藤昇、小山啓子、市澤哲、河島真、高田京比子、伊藤隆郎、緒形康、古市晃、真下裕之、村井恭子、大津留厚、奥村弘	4．発行年 2018年
2．出版社 山川出版社	5．総ページ数 176
3．書名 歴史の見方・考え方	

1．著者名 小池登、佐藤昇、木原志乃、松原俊文、澤田典子、近藤智彦、瀬口昌久、中谷彩一郎、勝又泰洋	4．発行年 2019年
2．出版社 京都大学学術出版会	5．総ページ数 348
3．書名 『英雄伝』の挑戦	

1．著者名 髙畠 純夫、齋藤 貴弘、竹内 一博	4．発行年 2018年
2．出版社 河出書房新社	5．総ページ数 128
3．書名 図説　古代ギリシアの暮らし	

1．著者名 小島毅、葛西康徳、土田健次郎、堀池信夫、岡田真美子、吉水千鶴子、手島勲矢、谷川多佳子	4．発行年 2018年
2．出版社 岩波書店	5．総ページ数 192
3．書名 知の古典は誘惑する	

1．著者名 Yoshida Shunichiro, Internationale Thesauruskommission	4．発行年 2018年
2．出版社 De Gruyter	5．総ページ数 88
3．書名 Thesaurus linguae Latinae, IX.1.iii	

1．著者名 小田中直樹・帆刈浩之・佐藤昇・千葉敏之・上野雅由樹・池田嘉郎	4．発行年 2017年
2．出版社 山川出版社	5．総ページ数 346
3．書名 世界史／いま、ここから	

1．著者名 佐藤昇・大津留厚・高田京比子・小山啓子・奥村弘・市澤哲・河島誠・古市晃・緒形康・真下裕之・伊藤隆郎・村井恭子	4．発行年 2018年
2．出版社 山川出版社	5．総ページ数 176
3．書名 歴史の見方・考え方: 大学で学ぶ「考える歴史」	

１．著者名 桜井万里子・本村凌二	４．発行年 2017年
２．出版社 筑摩書房	５．総ページ数 222
３．書名 集中講義！ギリシア・ローマ	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	吉田　俊一郎 (Yoshida Shunichiro) (00738065)	慶應義塾大学・文学部（三田）・講師（非常勤） (32612)	
研究分担者	上野　愼也 (Ueno Shinya) (60733871)	共立女子大学・文芸学部・教授 (32608)	
研究分担者	葛西　康徳 (Kasai Yasunori) (80114437)	東京大学・大学院人文社会系研究科（文学部）・教授 (12601)	
研究分担者	齊藤　貴弘 (Saito Takahiro) (80735291)	愛媛大学・法文学部・准教授 (16301)	

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	桜井　万里子 (Sakurai Mariko)		

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	宮﨑　亮 (Miyazaki Makoto)		
研究協力者	平田　松吾 (Hirata Shogo)		

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計4件

国際研究集会 International Conference on Character Portrayal in Attic Forensic Speeches	開催年 2021年～2021年
国際研究集会 The 4th Euro-Japanese Colloquium on Ancient Mediterranean World	開催年 2018年～2018年
国際研究集会 古代史研究会第６回春季研究集会、第1部：「声をあげる人々―古典期アテーナイの討議的民主政―」	開催年 2019年～2019年
国際研究集会 ミルコ・カネヴァロ博士講演会	開催年 2019年～2019年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関